



第34期放射線安全取扱部会 部会長、副部会長ご挨拶

第34期部会長就任にあたって

部会長 渡部 浩司



第33期に引き続き、第34期も部会長を務めさせていただくことになりました。前期におきましては、部会長1年目で至らぬ点多々ございましたが、会員の皆さまに多大なるご支援をいただきました。会員の皆さまに改めて御礼申

上げます。今期も引き続き、皆さまのお力添えをいただきながら、本部会を更に発展させていく所存です。どうぞよろしく願いいたします。

この原稿が出版される頃には、落ち着いていることを祈っておりますが、現在(2026/4)、中東情勢がたいへん緊迫しており、全世界的な緊急事態の様相を呈してきました。我々の業務は今回の事態と密接に関係しています。国内で利用されるRIの多くは海外からの輸入品であり、国際的な物流網の混乱により、供給が途絶えるリスクを常に抱えています。また、今後は国際的な視点を持ったセキュリティ対策がより重要視されるでしょう。そして原子力を含めたエネルギー対策も岐路に立たされているといえます。我々が携わっている放射線安全にかかわる業務は、決してマイナーな業界の仕事ではなく、社会にとって極めて重要な位置にあることを認識すべきです。RRI (Responsible Research and Innovation) という言葉をご存知でしょうか? 筆者も最近、科学技術社会論の専門家の先生から教えていただいたのですが、RRIとはEUの科学政策から生まれた概念であり、科学技術の研究開発プロセスにおいて、環境や社会への潜在的な影響を考慮し、社会の価値観やニーズ、期待と合致するように進める枠組みのことを言いま

す。近年の急速に広がるAI技術の社会的インパクトや、ナノメディスン、再生医療等の最先端医療と従来の生命倫理との不整合等を背景に生まれた概念ですが、RRIは、放射線の安全取扱において、極めて重要な示唆を与えてくれます。放射線は目に見えないことから、社会的な不安や過剰反応を引き起こしやすい性質を持っています。これらを解消し、社会の理解と信頼を得ながら研究開発や利用を進めるためには、RRIの考え方にに基づき、社会との対話や協働(社会共創)を重ねていくことが不可欠です。我々は福島事故から多くを学び、リスクコミュニケーションの重要性をよく理解しています。そして、昨今、急速に国内で広がりつつある核医学治療等の放射線を用いた新しい技術開発において、科学的な有効性だけでなく、社会的な合理性や倫理面での課題が必ず伴います。RRIでは、研究の初期段階から、これらの倫理的・法的・社会的課題を発見・予見し、対処することを求めています。その際に、我々のような安全取扱の専門家が重要な役割を果たすことができます。RRIは、科学の発展において、多様性の確保により、新しい価値を生み出すことをうたっています。本部会は、まさしく多様な業種、背景を持つ部会員が集まっており、新しい価値を創造できるポテンシャルを持っているといえるでしょう。

さて、この多様な部会員が一同に集まるのが年次大会です。今年は東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所事故から15年という節目を迎える年です。そして福島の地で年次大会が開催されます。震災後の15年で各業種が培ってきた安全管理の知見を持ち寄り、情報交換を行うことで、新たな価値を創造できる可能性があると考えています。ぜひ今年の年次大会、福島にお越しください。

(東北大学先端量子ビーム科学研究センター)

副部長（企画専門委員長）の就任ご挨拶

副部長 牧 大介



この度、副部長（企画専門委員長）に就任いたしました(株)千代田テクノ大洗研究所の牧と申します。2022年以来4年間、企画専門委員を務め、今第34期は山本由美先生（東北医科薬科大学）からバトンを引き継ぐことと

なりました。どうぞよろしくお願い申し上げます。

筆者は2016年に放射線安全取扱部会に入り、今年で10年になります。この期間の半分以上は京都大学複合原子力科学研究所（旧：京都大学原子炉実験所）に在職し、RIから研究用原子炉まで幅広い放射線安全管理の実務を学びました。研究所では放射線取扱主任者として経験豊富な先生方のご指導を受けることができました。

放射線安全取扱部会の部会員の方々は、日々、放射線施設の安全管理に努め、大小様々な問題に対処されています。その結果、放射線管理の「知恵」が個々の部会員の中に蓄積されています。2024年より年2回程度のペースで、企画専門委員会は「放射線取扱施設における安全管理技術の継承」分科会（代表者：山口大・坂口修一先生）と合同で「放射線の安全管理技術を共有するシンポジウム」を開催しておりますが、このシンポジウムは、放射線管理の「知恵」を共有する試みでもあります。今後もシンポジウムを企画専門委員会活動の柱として継続したい、と考えています。

昨今、放射線利用の裾野は広がる一方で、放射線管理の必要性を十分に理解できないまま放射線利用されるケースが増えてきています。このようなケースにおいて日々ご苦労されている方々に対しても、企画専門委員会としてアプローチしたい、と考えています。

最後に、筆者は渡部部長はじめ他の本部運営委員の皆さまと部会活動を盛り上げて参ります。部会員の皆さまのご指導、ご助力、何卒よろしくお願い申し上げます。

((株)千代田テクノ 大洗研究所)

副部長（広報専門委員長）

副部長 角山 雄一



前期に続き副部長（広報専門委員長）を拝命いたしました京都大学の角山でございます。前期では皆さまのお力添えを賜り、副部長としての職務を無事全うすることができました。厚く御礼申し上げます。また、広報専門委員

会では、『Isotope News』主任者コーナーにおいて、新シリーズ「つなぐつながる RI 施設～紙上で巡る施設探訪～」及び「のぞいてみない？ RI 施設の研究者」や、通算 800 号特別企画「放射線安全管理の開拓者たちが示す未来への道しるべ～レジェンドたちの軌跡～」、2026 年 2 月号では震災から 15 年を振り返る記事、等を掲載することができました。このように多彩な記事の掲載が実現できましたのも、ご執筆くださった皆さまのご協力、並びに広報委員の皆さまの多大なご尽力の賜物であり、あらためて深く感謝申し上げます。なかには、当方の無理なお願いにより、やむを得ず執筆をお引き受けくださった方もいらしたかもしれません。どうかご寛容を賜りますようお願い申し上げます。

さて、新たな期を迎え、あらためて周囲に目を向けますと、近年の AI 技術の進歩はまことに目覚ましく。大学では、学生教員問わず今や欠かせないツールとなっております。いよいよこの業界にも AI の波は届いているようで、安全管理に役立つプログラムの作成や法令相談の相手等、活用例をうかがう機会も増えました。もっとも、新技術が急速に普及する一方で、現場では泥臭くとも地道な業務や、経験に裏打ちされた職人技とも言える安全管理の手技等が依然として不可欠です。広報専門委員会では、こうした最新技術の動向から、現場に根ざした地道な安全管理に関する話題まで、幅広く多様なテーマを今後も取り上げて参ります。

渡部部長、牧副部長と共に、そして皆さまのお力をお借りしながら、本部会を今期も盛り立てて参りますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

(京都大学環境安全保健機構)